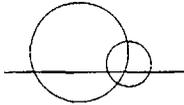


〈展示会〉



シカゴと神戸での展示会と講演会

東亜同文書院記念センター委員 東亜同文書院第42期卒業生 小崎昌業

東亜同文書院大学記念センターは、そのオープン・リサーチ・センター整備事業4年目に当たる2009年については、3月26日（木）から29日（日）まで、米国シカゴのシェラトン・ホテルでのアジア学会において、また、11月2日（月）から4日（水）にかけて神戸国際会議場で、それぞれ同文書院の展示会と講演会を実施することにした。

上記のアジア学会は、1941年ミシガン大学で創立され、現在会員7,000名を擁する国際大組織である。しかも今年の研究会は、4日間でシェラトン2階にある多数の会議室で、朝から夜まで2時間単位のセッションが249も開催されることになっていた。この学会への出展は、ミシガン大学のライブラリアン仁木氏に強く要請されて実現したのであるが、講演の申し込みは、2008年8月に終了していたので、これについてはシカゴ大学のライブラリアン奥泉氏の斡旋で、アジア学会終了の翌日3月30日（月）に予定された「シカゴ大学ジャパンツアー」において実施されることになった。

さて私は、3月25日（水）夕刻成田発、同日午後シカゴ着、先着の愛大関係者7名とヒルトン・ホテルで合流した。26日（木）朝、全員で会場のシェラトン・ホテルに向かい、展示場で出展の準備をした。昼食後、全員が好天気の下、ミシガン湖畔にあるネイビー・ピアまで歩行し、続いてダウン・タウンを見学した。

1964年の夏、オタワの在加日本大使館に勤務中だった私が休暇をとり、車を馳って北米縦断の途次、訪れた時のシカゴの街の様子を思い出して較

べてみても、高架鉄道が動いていたダウン・タウン等の様子は、余り変わっていないように思った。但し、シカゴは著名な建築物が多い街である。1963年印度からカナダに転任した直後ケネディ米大統領が暗殺され、日本大使館のカナダ人女子職員が泣きながら私に告げに来たことを思い出していた。

さて、この日夕刻、我々全員この高架鉄道でサウスループにあるチャイナ・タウンに行き、中国レストランで賑やかな学会の夕食会を楽しんだ。アジア学会員約200名（日本人、中国人、韓国人、米国人等）が一堂に会し、中国料理を味わった。

27日（金）朝、徒歩でシェラトン・ホテルに行く。同ホテルの地下展示室に138ブース、2階会議室に4日間で講義249セッションが開催されていて、学会員は好きな時に何処にでも参加出来た。例えば、世界の主要出版社、Harvard Univ. Press, Univ. of California Press, OCLC, Cornell Univ. Press, Columbia Univ. Press, Oxford Univ. Press, Hong Kong Univ. Press, Chinese Univ. Press, The Korea Society 等々、日本からはクレス出版、大空社、不二出版、ゆまに書房、雄松堂、柏書房、紀伊国屋書店、八木書店、丸善インターナショナル、図書刊行会、日本図書センター、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞データベース等が競って出ていたが、大学からは愛知大学1校のみの出展であった。ただ各社の中には日本外務省執務報告、戦前の上海における日本人の生活（執筆者が同文書院教授）、アジア諸国写真集等、自分にとっ

て懐かしい内容の出展書籍があった。

28日（土）朝、シェラトン・ホテルに行き、展示会、講演会を見て廻る。わが愛大ブースにも関心を持つ人達が来る。

29日（日）朝、昨夜からの雪が積もっている中、シカゴ市民のマラソン大会が開かれ、大勢の人が走っている。漸く掴まえたタクシーでシェラトン・ホテルの会場に着き、12時までには会場を整理し、展示品を収納梱包する。会場に近いレストランで昼食後、皆と別れてヒルトン・ホテルに戻り、近くのシカゴ美術館に行く。17時閉館。19時ヒルトン・ホテルの2階に全員集合し、今夜の夕食はイタリア料理と主張して探したところ、ホテル近くで見つかり、狭い部屋だったが何とか旨い夕食にありつけた。

30日（月）朝、全員タクシーでハイドパークにあるシカゴ大学に向かう。この大学は1890年ジョン・D・ロックフェラーの尽力によって創設され、調査研究を目的とした大学院大学を主体としており、ノーベル賞受賞数は世界一を誇っている。広いキャンパスの中を案内され、学生食堂で昼食をとる。

午後、有名なレイゲンスタイン・ライブラリ Regenstain Libraryの523号室にアジア学会出席者（日本人・米国人）が集まり、「シカゴ大学ジャパンツアー」が始まった。15時から16時まで藤田教授による「東亜同文書院大学の歩み（1901～1945年）と中国調査大旅行」について、16時から16時30分まで成瀬ライブラリアンによる「東亜同文書院大学出版物のデータベース」について、それぞれ公演があり、質疑応答が重ねられ、盛況に終わった。

続いて学生クラブの2階別室に於いて、ノーベル物理学賞を受賞した南部陽一郎先生を囲み、夕食会が行われた。先生と私は年齢が一歳違うだけで、話がよく合ったが、シカゴ大学の生活の懐の深さと広さを窺って羨ましくなった。

31日（火）朝、シカゴ空港で、日本へ直行する

関係者全員と別れ、私は1人シアトルに向かった。

11月1日（日）午後、神戸三宮ポートピア・ホテルに行く。戦前、東亜同文書院大学の学生だった時、三宮沖からの船で上海に向かったことを懐かしく思い出す。2日（月）から4日（水）（10時から18時）まで開催された東亜同文書院大学の展示会と講演会を手伝うためである。会場は、ホテルに隣接する神戸国際会議場であった。

2日（月）、展示室の準備を急ぐ。展示室は表側3ブース（内1ブースは孫文記念館から借用した展示品用、他のブースは東亜同文書院大学用）、裏側1ブースは愛知大学用とされ、入口受付のテーブルには売却用の東亜同文書院大学関係書籍、来訪者用名簿等を置いた。

3日（火・文化の日）、朝から見学者多数集まる。滬友会々員数名も含む。13時から15時まで展示室の前の国際会議室（定員240名）で次のような講演を行った。

①「東亜同文書院とその歩み・中国調査大旅行」藤田佳久愛大教授・愛大東亜同文書院大学記念センター長、②「孫文と神戸」安井三吉孫文記念館々長、③「孫文と長崎」横山宏章北九州市立大学大学院教授、④「孫文と東亜同文書院・愛知大学」武井義和愛大東亜同文書院大学記念センターポスドクター。

孫文と東亜同文書院との関係について見ると、東亜同文書院出身の山田良政・純三郎兄弟が、兄は広東省惠州の蜂起に参加して戦死し、弟は孫文の秘書として、孫文の死に至るまで中国革命のために尽瘁した、極めて強いものがあつた。

孫文は、中国の民主革命、近代化の先駆者として著名であつた。58年の生涯のうち革命運動に全力を投入したのは約30年。海外亡命が約15年、そのうち日本での亡命が9年。日本を革命運動の避難所、根拠地として来日15回、うち12回が亡命、3回が公式（東亜同文会が招待）、非公式訪問であつた。

1894年に興中会なる最初の革命組織を作ってから、1905年に東京で中国同盟会を結成し、6年後の辛亥革命につながる。この頃、孫文は、全面的に日本側の、特に民間の財政援助に頼り、借款の提供、鉄道、鉱山、航運業などを担保にしてかなりの額を入手している。1912年清朝を打倒し、中華民国が成立するが、すぐに袁世凱の専制政治に取って代られ、1913年から軍閥支配との戦いが1925年の孫文の死まで続く。その間孫文は、1917年広東政府を改組し、1924年連ソ、容共、労農援助の三政策を掲げ、黄捕軍官学校を設立し、反軍閥、反帝国主義の目標を打ち出す。

孫文は、次第に日本批判を強め、1924年神戸における「大アジア主義」なる講演に於いて「日本が西洋の覇道の手先となるか、東洋の王道の守り手となるのか」と結び、その覇道政策を批判し、翌年北京で死ぬが、その臨終の席に山田純三郎がいた。今回の展示品の中には、孫文と純三郎の親密な関係を示すものが多くあった。

同日夕刻からポートピア・ホテル内で神戸愛知大学同窓会が開催され、滬友会からも何名かが参加していた。

4日（水）正午、私は神戸を離れて滋賀県に向かっていた。（完）